

# 現状維持を伝える北朝鮮年頭報道

恒例だった金正恩総書記の「新年の辞」は

二〇二〇年から「労働新聞」を通じて

朝鮮労働党の方針を伝えるスタイルに変化した。

金総書記が一步引いた意味は何か。

二二年初頭の方針をそのまま続ける理由とは。

朝鮮労働党機関紙「労働新聞」元日付は、二〇二一年  
二月二七日から三一日に開催された党中央委員会第八期  
第四回全員会議（総会）の様子を「偉大なわが国家の富強  
発展とわが人民の福利のためにさらに力強く闘っていこ  
う」と題して概略的に報じた。毎年元日、金正日政権下で  
は「新年共同社説」が掲載された一方、金正恩氏は金日成  
時代の「新年の辞」を復活させていたが、二〇年からは党  
の会議について報じることで新年の方針を示すという独自  
性を発揮している。

それは、最高指導者個人に集中しがちな責任を分散させ  
るべく、党組織を通じた統治スタイルを重視する一環だと  
考えられる。過去最長の会期となった五日間のうち三日間

慶應義塾大学教授  
**磯崎敦仁**

いそぎき あつひと 一九七五年生ま  
れ。慶應義塾大学大学院修士課程修了  
後、ソウル大学大学院留学。在中国日  
本大使館専門調査員、ウッドロー・ウイ  
ルソンセンター客員研究員などを歴任。  
著書に「北朝鮮と観光」「新版北朝鮮  
入門」（共著）など。

は「分科別研究及び協議会」が開催されたことや、従来の  
全員会議で「指導」していた金正恩総書記が、今回は「参加  
」したと報じられたことも同じ文脈で説明できる。

議題は、①二二年度の党及び国家政策の執行状況総括と  
二二年度の事業計画について、②二二年度の国家予算執行  
状況と二二年度の国家予算案について、③社会主義農村問  
題の正しい解決のための当面の課題について、④党規約の  
一部条項を修正することについて、⑤党中央指導機関メン  
バーの二二年下半年の党組織思想生活状況について、⑥組  
織問題（人事）であった。全体として内容に新味がなく、  
二二一年一月の第八回党大会の方針を再確認することに重き  
が置かれた。

## 国家防衛力を強化、国民の食生活を向上

議題①については、金正恩総書記が昨年を「社会主義建設の全面的発展への大きな変化の序幕を開いた偉大な勝利の年」と評価した。しかし、「最も重視する農業部門」でも「ワンステップ（進歩）」が成し遂げられたとするとどどまり、部分的な成果を過大に評価していることは否めない。昨年の目標だった平壤市内の一万户住宅建設も「基本的に終了」したにすぎず、「偉大な勝利」は、「厳しい難関」の中、かろうじてしのいだことを意味している。

また、金正恩総書記は「多事多変な国際政治情勢と周辺環境に対処して南北関係と対外事業部門で堅持すべき原則的問題と一連の戦術的方向を提示した」という。「米国」「南朝鮮」への直接的言及については対外的公表が控えられたものの、昨年六月の第三回全員会議で提示された「対話と対決にともに備える」方針に変更はないと見ている。「国家防衛力」の継続強化も明示され、一月五日には極超音速ミサイルの発射実験が実施された。

議題②の決算・予算案については全く明らかにされなかったが、最高人民会議に党中央委員会が議案を上程するという、金正日政権末期以降のプロセスを踏んだものと

なった。

議題③は、一九六四年に金日成委員長が発表した「わが国の社会主義農村問題に関するテーゼ」を彷彿とさせる。農民への思想教育強化などが骨子で、画期的な策が提示されたわけではないが、金正恩総書記が「食生活文化を白米と小麦料理中心に変える」と指示したことは白米至上主義からの転換として注目に値する。二〇二一年九月二九日の「施政演説」でも「人民に白米と小麦を保障して食生活を文明あるよう改善していく」とされていた。

議題④の党規約改正については、「党建設と党活動を正規化、規範化することにおける実践的意義を持つ」ものとされ、マイナーチェンジと見られる。

議題⑤の、党幹部の「思想生活状況」については、前回会議から定例化している。外交を動かしづらい現在、思想教育など足元固めに集中していると言える。

議題⑥では、内閣副総理兼国家計画委員会委員長の朴正根（パク・ジョングン）を政治局委員に、社会安全相（警察トップ）への就任が判明した李泰燮（リ・テソプ）を政治局候補委員にすることなどが発表されたもののサプライズはなく、昨年新設された「総書記の代理人」たる第一書記のポストは依然として空席の模様である。●